

順位	自動車				円板			
	男	年長	男	年少	女	年長	女	年少
1	W	白	W	白	7	赤	7	赤
2	23	黄緑	B	黒	23	黄緑	5	橙
3	B	黒	1	黄	5	橙	3	赤み黄
4	13	紫み青	13	紫み青	B	黒	13	紫み青
5	G	灰	23	黄緑	W	白	1	黄
6	21	緑	15	緑み青	3	赤み黄	9	赤み紫
7	19	青み緑	3	赤み黄	1	黄	19	青み緑
8	15	緑み青	21	緑	13	紫み青	11	紫
9	5	橙	G	灰	21	緑	23	黄緑
10	7	赤	7	赤	19	青み緑	15	緑み青
11	3	赤み黄	19	青み緑	G	灰	17	青緑
12	17	青緑	5	橙	9	赤み紫	21	緑
13	11	紫	11	紫	11	紫	3	赤み黄
14	1	黄	17	青緑	17	青緑	7	赤
15	9	赤み紫	9	赤み紫	9	緑み青	15	緑み青

(順位以外の数字は色相番号、相応する日本名を付記する)

- 「血」としての意味)の現実的規定が見られる。
 つけが見られた。
 二、年長、年少の差は比較的少ない。
 三、性別の差は大きい。
 四、色紙その他の刺戟、環境を異にする幼児、一歳年少児について調査を進める要がある。

幼稚園においての遊びに

関する研究

愛育研究所

植松治子 渡辺益江 吉武郁子

中村徳子 小島玲子 住吉玲子

神郡敏子

○自由遊びの一形態(期間昭和三十三年四月より三十三年三月までの一か年制)

一、研究方法及び当面の目的。

日常子どもと生活を共にしている保育者とその観察者とし、平常保育における自由遊びの時間で最もよく遊ばれている遊びを観察し、それを記録の対象とした。環境により、子どもたちの遊びも多少の差があることを予想し、全国的にわたって幾つかの、幼稚園からの資料を望んだのであるが、この研究をするにあたっては、野村あるいは、研究期間、その時の事情のため、今回は、東京地区の山の

手四地区、下町四地区の幼稚園の保育者達の手により、出来るだけ実体を忠実に記録し、自由遊びの実体をくわしく識ることにより、従来、ともすれば自由遊びが放任の形になりがちなる実情を反省し、新たな眼をもって、これを重視し、加えて、自由遊びのよりよき指導方法なり、誘導のてだてを採らんとした。

◎われわれ保育者の保育中の観察及び記録であるから、そのために受けた制約や、各条件が伴うのは当然であるが、その反面、保育者でなければ、つかめない生々しい実体が繊細に浮かび上ったことは、この研究の大いなる収穫であった。実体をまとめた順に要約して次に述べる。

○1 幼児の遊びの動機

- 1 入園当初はどんな遊びが好まれるか、遊びの種類とその傾向
 - 2 ごっこ遊びにみられる発達段階
 - 3 グループ形成について
 - 4 ごっこ遊びに男女差があるか
 - 5 遊びの具体的内容、例
 - 6 遊びの発展とリーダー
 - 7 遊びの消滅、その動機
- 頁数の関係で直ちに結論に走るが、幼児の自由遊びは、放任教育の形では絶対にいけないということ、しかし、だからといって直ぐに指導、誘導の手をいたすらずらに差伸べることが優秀な保育技術ではないということが云える。この結論が出るまでの、種々の自由遊びの研究過程や、考察の点については、愛育研究所内、遊びの研究員まで連絡下されば、出来るだけ詳しく説明させていただくつもりであるし、今後次のような問題についてもふれていくつもりであ

る。すなわち遊ばない子ども、ホス、リーダー、遊びと遊具との関係、その他この度の研究で浮び上った問題を課題として。

積木遊びにおける

幼児集団の比較

東京・関屋幼稚園

清水エミ子

〈目的〉

どうしたら正しい社会性(交友関係)が身につくようになるか(三十一年度の結果をもとに)積木遊びの集団を比較観察した。

〈対象〉

一年保育男児一二名、内外向性共に六名ずつ。

〈方法〉

入園後五月末まで個々の積木遊びを観察、六月後十月末まで対象児を中心に観察、十一月後十二月、軽いことばの刺戟を与えて比較観察一月後三月、課題(教師の意図する刺戟、グループ全員、グループをませた時、作るものを課題するなど)を与え比較観察した。

〈結果〉 (1)、性格のちがいと特質

消極グループ(積木遊びに対して積極的)社会性なく集団に入りにくく感情の変化はげしいが表さないのでわかりにくい

積極グループ(積木遊びに対して消極的)社会性はあるが粗雑で